共存の時代

—現代日本社会のエートスをめぐって—

加藤春恵子

はじめに

ひとつの時代[1]が終り，ひとつの時代がはじまったという実感が，社会のなかに生きる人々をとらえることがある。その転換点は、たとえば1945年8月15日といったような明確な時点である場合もある。しかし，多くの場合，時代の変り目はそれほどさだかではなく，次のようなかたちで歴史のなかにたちあらわれる。すなわち，大人たちがふと気づくと，何時の間にか，自分たちとは著しく違ったエートスをもち，社会的性格をもった若者たちが大量に登場しているというかたちがそれである。大人たちの「今の若い者は…」という声がきかれないときはないといってよいと思われるが，とりわけその声が大きくなり，新聞・雑誌・書物などによって増幅されて若者たちとの異和感が広く話題となり，世代間の葛藤が顕在化してくるとき，人々は時代の節目を通過したことを知るのである。

ここでそのエートスを問題にしようとしているひとつの時代は，そんなかたちで人々の意識のなかに登場した。その節目は，今振返れば1973年頃にあったといってよいのではないかと思われる。この年，ベトナム戦争が正式に終結し，オイルショックをもって高度成長期が一応の終りを告げた。これと前後して，若者たちの大学での異議申立ても少なくなり，教育問題・青少年問題が依然として人々の関心を集めているとはいうものの，焦点が移動してくる。大学生から小・中・高校生に焦点が移され，特定の非日常的な「できごと」ではなく，

進学競争・都市化等々の進行に伴って生じている彼らの日常的な状態そのものが社会問題としてとり上げられるようになる[2]。そして，「シラケ」「四無主義[3]」「やさしさ」などのことばを多用して彼らの状況をえぐるルポルタージュが行なわれるといった状態が今日まで続いている[4]。いま大学にいる若者たちは，物心ついたとき自分たちにこれらのレッテルが冠せられているのに気づき，抵抗を感じながらも一面ではそれらに呪縛され，一面ではそれらを逆用してはげしい進学競争，ひいては競争社会の荒波から身を守ってきた人々なのである[5]。私は，彼らがこうしたレッテルの下に一くくりにされて脚光を浴びるようになってから，今日にいたるまでを，ひとつの時代としてとり上げ，その前の時代との比較において，この時代のエートスを考察してみたいと思う。

前の時代[6]が国の内外共に対立・激動の続いた時代であったとすれば，この時代はさまざまなできごとを織込み，変動のきざしをはらみながらも一応の共存・安定の続いてきた時代である。前の時代が社会的影響力の強い思想（マルクス主義，実存主義，民族主義，さらにはマルクス主義と民族主義の接点にかたちづくられた毛沢東思想など）やカリスマ的指導者（ゲバラ，カストロ、毛沢東，ホーチミン，ドゴール，ケネディ等）を数多く有した時代であったのに対し，この時代は思想の社会的影響力が弱まり，カリスマ的リーダーも見出し難い時代だという点においても対照がみられる。諸々の思想やリーダーの影響を直接，間接に受けながら若者たち自身が世界・社会・大人に対して焦立ち怒っていた姿が前の時代を象徴するとすれば，これといって行動にかりたてるものもないままに一見おとなしく受験，就職などの諸制度に適応していながら，しかもどこか気の知れないところのある若者たちに，大人――とりわけ，まじめに働き，人々をリードしてきたと自負している指導者意識の強い人たち――の方がとまどい，焦立っている姿が今の時代を象徴する[7]といってもよいだろう。'60年代の若者たちも，確かに大人たちをとまどわせた。しかし，その行動の極端さにおいて大人たちを驚かせ悲しませ悩ませたとはいえ，'60年代の青年たちは基本的に歴史のなかで馴染み深い「怒れる若者」の範疇に属していた。

それに対して，今日の青年たち[8]には，従来の「若々しさ」のイメージとは大きくかけ離れたところをもつ者が多い。それだけに，彼らをめぐるとまどいも大きいのである。

ひとつの時代のエートスは，前の時代のさまざまなできごと——国際政治や国内政治の動向，生産や消費の仕組みの変化，技術の発明と普及，思想の盛衰等々——のなかで徐々に醸成されてくる。そして，そのエートスの醸成過程のただなかで育ち，そのエートスを内面化した社会的性格の持主たちが新たな世代として社会のなかに登場し，前の時代のエーストを内面化している大人たちに異和感を覚えさせ，葛藤をひき起こすにいたって，新しい時代がはじまるのである。この葛藤は，集団間，集団内部，個人間，個人内部などさまざまなレヴェルで起る。それは，世代断絶といったかたちで顕在化することもある。また，一見なにごともないように事態が推移していながら，実は心のなにか——とりわけ，大人の例であれ青年の例であれ，「ものわかりよく」相手方に合わせている者の心のなかに——葛藤が起っていることもある。この心の中の葛藤は自覚化されていることもあり，深層に抑圧されたまま推移して突如何らかのきっかけで爆発して精神障害・心身症・暴力行為・自殺といった事態をひき起す場合もあると考えられる。今日の若者たちは一見静かに既存の社会制度に適応しているだけに，際立った対立をひき起すことは少ないだろう。しかし，それだけに却って青年の側にも大人の側にも，小さな異和感の積重ねによってストレスが畜積される可能性もあると考えられる。

以下，今日の日本の若者たちとの対話のなかで学んだことや彼らとの接触のなかで私自身が感じた異和感や共感と各種の調査データ結果とを結びあわせて，いま我々が生きている時代のエートスについての仮説を描いてみようと思う。その目的のひとつはこの時代に生きる人々がさきに述べたような葛藤を自覚化して，互いの異質性の理解の上に立った新しい関係をつくり出していくための手がかりを得ることにある。また，もうひとつの目的は，この時代の到達点——この時代の人々が人間の歴史に新たにもたらしたもの——と問題点とを

見きわめ，次にどのような時代を開くかということを展望する手がかりを得ることにある。勿論，私の接触している若者たちは日本の青年を代表するものではないし，また私自身の視点の偏りもあるだろう。そうしたことからくる考察の歪みを，さまざまな視点から御訂正，御教示頂ければ幸いである。

Ⅰ．共存倫理

Ⅰ－1．対決倫理の後退

この時代のエトスを一言で特徴づけるとするなら，「共存倫理」[9]というという名がふさわしいと思う。「共存倫理」と私が呼ぶのは，できるかぎり敵をつくることを避け，妥協点もしくは接点をさがし，相互不可侵，相互依存の関係に立って共存することに価値をおく行き方である[10]。この「共存倫理」は，「対決倫理」と対置されると考えられる。「対決倫理」とは，妥協を醜いものとし，あくまで自らの正義を主張して譲らず，自らの規準に従って他者の正否を判断してその内面にも干渉し，敵をつくってそれと対決することを辞さないことをもってとるべき道だとする行き方である。

対決倫理から共存倫理への重点の移動は，国際政治の世界でまず推進された。すなわち，第二次大戦の大量殺戮のあと，諸国民の「平和」への願いにつき動かされて，戦後の国際政治は「共存」の追求の場となった。破邪の剣をかかげ，愛国心や利害につき動かされて一国，二国がとび出すごとに，小規模の紛争ないし局地戦争にくいとめて世界大戦にいたらせまいとする努力がなされると共に，大国間の共存関係をつくり出すための交渉が進められた。1955年頃より冷戦状態からの雪どけが摸索されて米ソの一応の平和共存関係がつくられ，1962年頃から中ソの緊張関係が表面化する一方で1971年頃から米中接近の動きが著しくなって，米中ソの三国の間に緊張をはらんだ一応のバランスがつくられて今日にいたっていることは周知の通りである。また，ヨーロッパでは1957年にかつての敵国ドイツを含めてＥＥＣが結成され1973年より拡大ＥＣが活動するにいたり，1972年の東西両ドイツが相互に国家として認めあった条約の調印に

象徴されるように東欧と西欧の緊張も緩和されて今日にいたっていることも周知の如くである。一方では民族主義をかかげて新たに興ってくる国々があり，対決倫理も決して姿を消したわけではなく最近揺り戻し的な現象も目立ってはいるが，戦後三十余年の大きな流れとしては共存倫理が影響力を増してきたといえるだろう。特に，'70年代には中国が国際舞台に登場したことによって，いわゆる大国の間での共存構造が強化されてきていると考えられる。自国が正しいと信じることを他国に押しつけることを当然とする「強制倫理」と，いかなる場合にも話しあえば一致に達すると信じ，一致するまで話し合うべきだ考える「一致倫理」もしくは「コミニケーション信仰」の苦い挫折のうえに，立場の違いを前堤としたまま妥協点・接点を見出し，実質的な交流を進めようとする「共存倫理」が打ち出されたということもできるであろう。

このような国際的なレヴェルでの共存倫理の滲透のなかにあって日本の国内も変わってきている。まず政治に関していえば，国会議場での実力行使による強行採決や絶対阻止といった対決場面が減り，実質的な調整が行なわれることが多くなった。次に，経済に関しては，企業間では依然として激しい競争が続いているものの，組合と経営者の関係，企業と消費者の関係に変化がみられるようになった。組合と経営者の関係についていえば，労使協調路線をとるところが増え，またストライキなどの激しい闘争形態をとるところでもスケジュール闘争による対立のルーティン化が著しくなり，こうしたルーティン的な対立をする部分が経済界全体の賃上げのベースをつくるというパターンが定着した。また，企業と消費者の関係についていえば，金融機関を介在させてローン制度により大口の消費者をつくり出してこれともちつもたれつの共存関係をとり結ぼうという行き方が企業のなかに定着した。勿論，住民運動などのなかには激しい対決倫理に動かされたものもあるが，ここでも'60年代に比べれば激しい闘争意欲をもつ人々が減り，積極的に活動している人々のなかでも相手方との接点を見出そうという動きが顕著になっているといえるのではないだろうか[11]。

共存倫理の浸透は個人と個人の関係についてもみられる。職場や学校では，異質な人々の集合であることを認めたうえで目的遂行のための共同体として支えあい，あまり深入りしないで人間として共感できるところでふれ合っていこうという傾向が強まっている[12]。近隣では，都市の近郊住宅地や集合住宅を中心に，会えばにっこりして堅苦しくなく話しあえる程度の関係を保ち，必要なとき助けを求められれば快く力を貸しあうが，日頃はさらさらしたつきあいで干渉しあわないという関係が定着しつつある[13]。これは，かつての村落あるいは都市の共同体の特徴であり，今も一部に残っている，一面ではあたたかだが一面では拘束しあうことの多い，'おせっかい'や相互監視や偏見の押しつけあいなどを含んだ粘着力の強い関係とは違っている。また，産業化と共にこのような共同体が崩壊した後に残存し，あるいは流入した人々の間にみられる，未知の人と新しく関係を切り開いていく力をもたず，またそのような力をもってはいても干渉されたりさげすまれたりすることを恐れてかかわりをもとうとしないきずつきやすい人々がそれぞれに孤立して住み，ときおり孤老の死などによってクローズアップされる「砂のような関係」とも違っている。また，パーティやクラブなどのさかんなアメリカのコミュニティとも違っており，比較的助けあいや触れあいの必要度の高い子育て期の主婦たちを除いて，人々は基本的には家族のなかに安住して，家族間の交流はさほど盛んではないままに互いに傷つけあって不快な思いをしない程度の相互不可侵の共存関係のネットワークをとり結んでいるのである。

この相互不可侵の共存倫理は家族のなかにも浸透している。勿論，地域についてと同様きわめて密着度の高い家族もあり，それぞれがバラバラになっている家族もある。しかし，その中間に，それぞれの立場・考え方・感覚の違いを認めあって，傷つけあわないよう共存している家族が数多く存在する。悩みごとは友人に話すなどして外で処理し，家では心配をかけあうことを避け，一緒に食事をし，テレビを見，ときおりリクリェーションをし，スポーツなど趣味の話をすることによって場を共有する。こうした家族の成員は家族に対して深

いレヴェルでの対話や一致を求めようとはせず[14]，衣食住の保障と空気のような生存に不可欠ではあるがこれといって目立たないさらさらとした共存関係を求めているのである。こうした家族は，それぞれのニードを基盤とし，人間としての心の「ふれあい」——このことば自体「交わり」ということばなどとくらべてはるかに軽くさらさらとした人間関係を象徴している——の成り立つところでさりげなくかかわっていく共同体なのである。夫も妻も相手なくしては衣食住に不自由を来し，子は親なくしては生存も学歴も全うすることができず，親は子なくしては自分の生きた証をもちえず老後も全うしえないとそれぞれに思い定めて，大きな期待をもって深くかかわりすぎたが故にかえって傷つけあうといったような事態を避け，できる限り干渉や押しつけを排して，離婚も，家出も，勘当も起らぬようゲマインシャフトとゲゼルシャフトとの狭間にある種の共存関係をとり結んでいるのである。

共存倫理は個人の心のなかにも滲透している。今日，多くの人々は，心のなかに矛盾した情報や感情をかかえていたとしても，それらをさりげなく併存させておき，矛盾を止揚しようと深く思い悩むことはしないといった姿勢に慣れてきている。心のなかで対決が起こることを避け，あえて葛藤に耐えてアィデンティティを追求しようとはしないのである。

Ⅰ－2．「やさしさ」と「制度化された闘争」

「四無主義」とならんで，今日の若者たちに冠せられてきた「やさしさ」というラベルは，共存倫理と深いかかわりをもっている。勿論，内面から湧いてくる能動的なやさしさをもった若者も多い。しかし，ある世代を俄かに「やさしさ」が蔽うかにみえるからには，さまざまな種類の心理がそのレッテルの下に共存しているとみてよい。そのなかには防衛的，自衛的な要素も多く含まれよう。人を傷つければ傷つけ返されるかもしれないし，そうしたことはなくても自分の心がいたむ。だから，お互いの気持を大切にして，心の安らぎを乱しあわないよう，人を傷つけることを懸命に避けるし，仲間がどこかで負うた心の傷はいたわりあっていやそうと努力する。こうした心情をもつ若者たちの競争

社会への適応は微妙をきわめる。彼らには蹴落された人のいたみが感じられるから，他人を蹴落してまで出世したいとは思わない。しかし，しょせんこの社会から離脱して生きることはできないと思いさだめているから競争からおりることはしない。そして，試験や就職などのやむをえざる競争事態を，全身をうちこんで熱中しすぎることのないようにちょっと距離をおいて[15]「無気力」「無関心」を装いつつ「感動」しすぎないよう身を持して処理していく。彼らはあたかもゲームのように○勝○敗などと報告しあったり，ドラマのなかで与えられた役を演じる役者たちのように表舞台では演技を競いあいながらも幕合の楽屋では談笑したりして日々を過す。熱中して全身でぶつかればそれだけ失敗の傷も大きく，他のひとにあたえる傷も大きいことを直感しているからである。

ただし，勉強や仕事の場で無気力・無関心・無感動でたよりなくやさし気にみえる若者を見つけて彼らのすべてが生活のあらゆる場面でこれと同じ特性を示すなどと考えるのは早計である。彼らの多くは，大人たちの見えないところで打ちこめるものをもっている。これらの「打ちこめるもの」のうち本節とのかかわりで特に注目しておきたいのは次の点である。

共存倫理の滲透と共に，人々の闘争・対決意欲を満足させる社会的なしくみが発達してきている。ひいきを決めてその勝利を願い「敵」をけなして敵対意識をむき出しにすることのできる「見るスポーツ」——プロ野球・相撲その他のプロスポーツをはじめ年々応援合戦が盛んになって人々の郷土自慢意識を満足させている高校野球や愛国心を満足させるオリンピックなど——のテレビ番組の高視聴率，野球・ゴルフ・テニスその他の「するスポーツ」の隆盛，競輪・競馬・囲碁・将棋などの変らざる人気，インベーターゲームをはじめとするゲーム機械の普及など，このことを物語る現象は多い。「受験戦争」といわれる競争も，「やさしさ世代」に属しながらも比較的「やさしさ」の度合の低い若者たちにとって[16]は，向いあっての喧嘩などと比べて大勢が制度化されたゴールをめざして競うだけに，直接に他人を打ちたおしたといういたみを味わうことが比較的少なく，しかも，達成感・優越感を味わうことができて，青春の情熱を

吸収してくれる「制度化されたたたかい」である。こうした特定領域でのルールのある「闘争」ないし「競争」は，闘争好きな人々のエネルギーを吸収しており，内面化した対決倫理を心のうちにたぎらせている大人たちと同様，共存倫理の時代の若者たちもまたこうした「制度化された闘争」によって支えられてはじめて基本的な社会関係における共存を保ちえているのである。

II．共存倫理の周辺

前章で述べた共存のエトースは，他のいくつかの，見えない倫理，あるいは，見えにくい倫理，と深くかかわっている。本章では，それを生存倫理，相対倫理，実感倫理，人間倫理，人並倫理の5つに分けて考えてみたいと思う。

II－1．生存倫理

II－1－① 献身倫理の後退

第一に挙げておきたいのは，「生存倫理」である。ここで私が「生存倫理」と呼ぶのは，「自分が生きる」ということに第一の価値をおき，自らに与えられた生命を損わないで大切にしながら老年まで生き抜くことを追求するのが人の道だとする行き方である[17]。この「生存倫理」は「献身倫理」と対照をなすと考えられる。「献身倫理」とここで名づけるのは，人が自分自身のために生きることを許し難いものとし，人間は自分以外の何ものか――神，国家，社会，家族，恵まれない人々，理念，イデオロギー等々――のために耐え難きを耐え生命をも献げるべきだとする行き方である。

この「生存倫理」は，人間の歴史と共に古いといってよいかもしれないが，それが社会の表面に大きく登場したについては，第二次世界大戦，ベトナム戦争，70年前後の国内での対立緊張の激化，高度成長とそれに随伴して起った公害問題などが重要な役割を果していると考えられる。原爆を含む兵器の使用によって戦場と戦場外の町々を併せて世界各地で死者2,200万，負傷者3,440万人を出した第2次世界大戦は，多くの人々の心に「二度と殺したくない。殺され

たくない。戦争で死んだ人々の鎮魂のためにも平和を願い，のこされたいのちを大切にしあって生きていこう」という実感を残した。特に人類初の原爆被災国となり，敗戦と共にかって国家の教えた「正義」は他国民の生きる権利をふみにじる野望であったと知らされた日本人にとって，この実感は大きかった。ベトナム戦争をめぐる報道や反戦運動のなかで，この実感は再び強められた。それに加えて，70年前後の若者の異議申し立て活動の途中で「ゲバルト」の使用の度合が俄かに激しくなり，組織内，組織間の流血や無辜の市民をまきこむテロなどの流血事件が生じ，テレビという臨場感のあるメディアがこれを生々しく報道するにいたって，「理由の如何を問わず，殺しあいにつながる力の対立は御免だ」という雰囲気が強まり，社会変革のために自分や隣人のいのちをも賭けようというかたちの献身倫理は影響力を弱めた。さらに，高度成長は一方では雇用の相対的安定と賃金上昇と消費水準の上昇とをもたらし，人々に「生きていればかつては一部の人々だけのものだったいろいろな楽しみを味わえるのだ」という実感を抱かせ，オイルショックによってしのびこんだ不安は，いよいよ人々に「生きていてこそ味わえる豊かなくらし」のぬくもりを抱きしめさせることとなった。また，高度成長と共に激化した「交通戦争」や空気汚染，食糧汚染その他の公害問題は，人々の「いのちを大切にしたい」という気持を改めて強く刺激し，医療への人々の関心を高め[18]，「するスポーツ」の隆盛を含む今日の健康法ブーム現象のひき金となったと考えられる。こうした状況のなかで，中年サラリーマンを中心とする男性たちの「会社への献身」の「モーレツ」度も'60年代に比べるといささか目立たなくなってきている。生きることを第一義とするエートスは，生きることへの希望と危機感との微妙なバランスの上に醸成され，強化されて，平均寿命延長という目にみえる事実をもたらしてきたといってよいであろう[19]。

II－1－②　人権思想の具体化

献身倫理の後退は一面では統合の危機をもたらし社会の機能・発展を妨げるという問題をはらみ[20]，個人の生き方に関してもさまざまな問題をはらんでい

る。しかしながら，「生存倫理」の滲透自体は基本的に人権思想の具体化の過程で起っていることであり，押し戻し難い歴史の流れである。人権の思想は，フランス革命以降力を増しつつあったとはいえ，第2次大戦終了時までは少なくとも国家権力によって遂行される「戦争」に抗しうるだけの強さを獲得してはいなかった。国のためとあれば人々は「敵」と規定された人間の生きる権利を侵して相手を殺し，自らの生きる権利を放棄して「敵」に殺されることに耐えねばならなかった。しかしながら，第二次大戦後の生存倫理の高まりと共に変化が起りつつある。たとえばベトナム戦争のさいにはアメリカの若者たちのなかに兵役忌避者が多くあらわれ，彼らはしばしば臆病者抜いされる代りにヒーローの役割を与えられ，人々に「戦争とは何か」を問いかけ，彼らを含む若者たちの「死にたくない，殺したくない」という声が国内，国際世論を喚起し戦争終結に導く大きな力の一つとなっている。敗戦と共に攻撃のための戦力を放棄し徴兵制度を捨てた日本では，今日，世界に先がけて「人は生まれた以上老年まで生きる権利をもち，たとえ国家といえどもそれを侵害できない。むしろ，国家はその権利を全うできるよう食糧の確保，物価のコントロール，福祉の充実，国際緊張の緩和等々によってそれを保障する責任をもつべきだ」という意識が多くの人々に定着しているといってよいだろう。「権利」ということばに異和感を抱く人々はなお多いものの，実質的には1945年以降着々と人権思想が滲透し，具体的条件が整えられてきている。生活保護，医療保険，老人医療の無料化，老令年金その他がそれである。日本の社会保障制度は欧米諸国と比べて未発達な点が多く幣害もはらんではいるが，こうした諸制度が生存倫理をはかない願いや空論に終らせないで，生活のなかに根ざしたものとする役割を果していることは確かである。

II－1－③　ホメオスタティックな社会

生存倫理は，一面では，産児制限の普及を土台として定着してきたともいえる。人類は久しく，あらあらしい無自覚的，非日常的な人口調節を行なってきた。人口は増えるにまかせられ，病気・餓死・戦争といった事態による死がそ

れに辛うじて歯どめをかけていた。戦前の乳児死亡率の高さや，昭和6年の東北，北海道地方の凶作に代表される農民の貧窮が満洲への植民地進出のエネルギーとなり，それが戦争につながったことなど想起すれば，1945年までの日本もその人類史の流れのなかにあった，とみることができる。しかし，戦後，産児制限により両親の数と同じ2人の子どもにとどめる行き方が普及したことによって人口と食糧をはじめとする資源とのバランスが保ちやすくなったことを通して，日本は，そうした古来のドラスティックなマクロ的な人口コントロールでなく，自覚的，日常的，ミクロ的な人口コントロールに依存する，きわめてホメオスタティックな自律的調節機構をもった社会に変化した。人々が自分とその家族の生命の綱が「運命」の手に握られていると思う度合が減り，計画を立てて子どもを生み彼らを管理して親の計画通りの一生を全うさせられるかのように考える度合が増した。子ども数がへった今，安全・愛情の保障とひきかえに，親に心配をかけるような賭けを含む飛翔はむずかしくなった。こうした状況のなかで，家庭内暴力などの激しい抵抗も一部にあるが，今日，多くの若者は自己実現の場を親の期待する道から外れぬ範囲にとどめ，怪我も不慮の死も期待される人生コースからの逸脱も招かぬよう自らを律して日々を送っている。

II－2．相対倫理

II－2－① 絶対倫理の後退

ところで，共存関係をつくるためには，相手方の立場を尊重することが必要である。

戦後の国際関係のなかでの共存への歩みは，まず，「西」側の諸国と「東」の社会主義諸国とが相互の視点に立って事態を見ることを学ぶことからはじまった。これは，両者が同じ立場に達したということではない。双方の主張を併記して相手の立場に「理解」を示したうえで妥協点をさがし，独自性は独自性として侵しあわず尊重しあうというのが，重要な交渉のあとで出される文書のお

きまりのパターンとなった。

このことは,「いかなる場合にも真理は一つだ。一方が白ならば他方は黒にちがいないし，何をおいてもこの唯一の真理——絶対に正しいもの——に到達しこれを共有せねばならない」という「絶対倫理」というべきものから,「いろいろな立場があり，どれもそれを信ずる人々からすれば正しいということがらもある。お互いに，できるかぎり尊重しあうべきなのだ」という「相対倫理」ともいうべきものへの移行を意味する[21)]。

この相対倫理への移行は，東西間に続いて南北間にも進行しつつある。西欧が植民地化して経済的利益を得ると共に自らの思考・生活様式を押しつけてきた諸国が異議を申し立て，自分たちからみた世界観を主張する勢いが強まってきた。ここでも西欧は，世界には多様なものの見方・感じ方・くらし方があり，それぞれに正否優劣の定め難いことを知らねばならなかった。かくして，かっては忌むべき，俗な，真理への忠誠心を欠いたものとされた相対主義が，西欧の人々の心に定着しはじめたのである。

西欧の人々の中には，自らを「絶対」とすることはやめたものの相対倫理をうけいれることはせず，東欧やアジア，アフリカ，中南米などの異世界のものの見方のなかに「絶対」をさがし求める人々もいる。また，非西欧には，こうした西欧人の憧憬を受けて今度は自分たちのものの見方や生活様式が「絶対」の位置に上るのだと信じ，西欧の影響を拒否しようとする人々もいる。たとえば，日本の経済的位置の上昇を背景とする最近の日本ブームのなかにも，そのような「絶対」なるもののなかみがいれかわったというだけの絶対倫理の残存が見受けられる。しかし，さまざまなかたちの絶対倫理の残存にもかかわらず，人々は，世界にはさまざまな生き方をもった国があり，集団があり，人間がいるのだという現実を認め，交換すべきものは交換し，維持すべきものは維持してそれぞれに尊重しあおうという新しい倫理をうちたてつつある。そうでなければ，相互排除，憎みあいが起り，やがては殺しあいにまでいたることを身をもって感じているからである。

国内においても，絶対を掲げて登場し，政権を獲得したときには一党独裁体制をとって自らの正義を全国民に滲透させずにはやまないとみられてきた集団が，異なる信条をもった集団との共存が可能であることを明示するようになっているのは，共存倫理・生存倫理・相対倫理とつながる時代のエートスに応えてのことであろう。

上記のようなマクロな状況と対応して，ミクロな状況のなかには「そういわれればそうだ」とか「あなたの立場もわかる」とかいったことばが多く登場し，心のなかには何れもそれなりにもっともだと思われるままにとりいれたさまざまな情報が小簞笥のあちこちのひき出しにしまいこまれて放置されているといったような状態で併存している[22]。無党派層の問題や若者のモラトリウム現象はこうした状況のもとに生じていると考えられる。

II－2－② 「対抗的相補性」の認識と非参加倫理

「支持政党をもたない」と答える人々の存在――とりわけ若者の間のそれ――が注目を集めて久しい。その比率自体は70年代半ばにいったん上昇したもののその後やや低落傾向をみせ，現在は60年代後半とさほど違わない数値を示している[23]。そのなかには全くの無関心・無知識の人々も含まれるだろうし，関心と知識をもちながらあえて支持政党をもたない人々も含まれるだろうことはかつても今も同じである。

ただし，状況の変化と若者の心理の変化からして，2つの時代の無党派層の間には次のような違いがあると推察される。60年代は政治的な集団への「参加倫理」ともいうべきものが人々を，とりわけ若者をとらえていた時代である。これは献身倫理－絶対倫理－対決倫理と深く関わりをもつものであり，たとえ実感として信じ切れなくともことばで語られる限りにおいて一貫性をもったある立場をうけいれそれが絶対に正しいと信じてそこにとびこみ自ら一つの立場の担い手として他の立場と対決するのが人間としての純粋な生き方だという考え方ないし感じである。この感じに促されてある人々は政党や学生集団にとびこみ，既存の集団に賛同できない人々はそうした人々どうしで集団をつくり，

自ら集団にとびこみ切れない人はうしろめたさをかかえながら支持者，同調者（シンパサイザー）となった。「見ている」ことは若者にあるまじき悪徳であった。

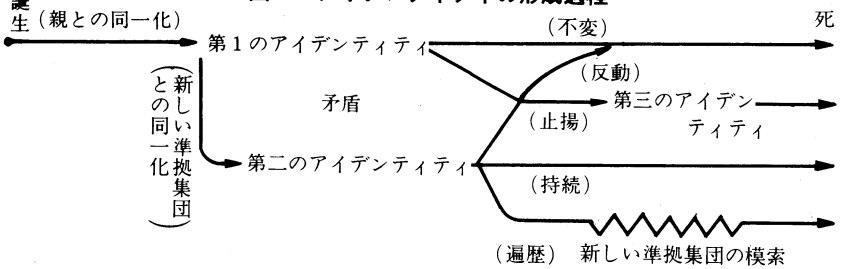
しかし，60年代の情熱のあとに「シラケ」が訪れて以降，「見る」ことは必ずしも悪徳とされなくなった。それと共に社会のなかで，あるいは集団のなかで対抗しあっているさまざまな立場の位置関係を見定め，それらが一見激しく争っているように見えながら実は互いに補いあって社会，あるいは集団の維持ないし発展に寄与しているという「対抗的相補性」に気づく人々も出てきた。こうした人々は，国や市町村あるいは自らの属するさまざまな集団での選挙に際しては自らは何れにもコミットせずその時々に社会，集団，あるいは自分自身のために必要と思われる部分に一票を投ずるのである[24]。

60年代の「参加倫理」と対比させていうなら，今日の若者にはむしろ「非参加倫理」ともいうべきものが滲透しているといってよいだろう。すなわち，正しいと実感的に信じ切れるものがないのに信じたふりをするのはむしろ不純な忌むべきことであり，信ずべきものが見つからない間はコミットしないのが自己に忠実で純粋な生き方だとする考え方ないし感じがそれである。ひとつの立場に深くコミットして他を「正しくない」と思いこむことには信じきれない自己をいつわるという点でも無理と虚構があり，しかも多くの人々との関わりを絶つことになると青年たちは感じている。絶対と確信するものをもたない人々が増えている状況のなかにあっては，何ものにもコミットせず非参加を貫くことはかつてほど孤独[25]でもなく軽蔑されることでもなくなっている。非参加者どうしのつきあいも生まれやすく日常的な学業やしごとのなかでの関係を楽しむこともできるし，全暇活動の盛んな時代のこととて趣味などを通して気軽な関係をとり結ぶこともできる。こうした関わりのなかには，ひとつ信念を共有する者どうしの親密感，連帯感はない。そのさびしさをかかえて，今日，多くの若者たちが，いまの時代なりの誠実さをもって真摯に生きているのである。

II－2－③　アイデンティティ形成をめぐる問題状況

こうした状況のなかで人々の自我形成過程もかってのそれとは違ってきてい

図1　アイデンティティの形成過程



る。対比のために絶対倫理の時代の日本人の自我形成過程をふり返ってみると，それは次のような特徴をもっていたと考えられる。まず，少年期までに，親あるいはその代行者との同一化 (identi fication) により第一のアイデンティティが形成される。この段階ですでに，母への同一化，父への同一化の二段階を踏み，自らのうちの母から内面化した側面と父から内面化した側面との矛盾止揚が行なわれている人と，父母が一体化していたりどちらか一方の影響が強かったりという理由ため一段階のアイデンティティ形成過程を辿った人との二通りがあると考えられるが，何れにしてもまず親あるいはその代行者との同一化によってアイデンティティが形成されることは同じである。次に青年期にさしかかるにつれて二つのコースに分れる。少年期に形成したアイデンティティを守り続けていく不変型の人と，これと対抗するよりどころを求めて活動しながら親とは異なる自我をきずいていく人々とがそれである。この後者のコースをとるとき，親を批判する視点を提供するよりどころ——絶対的な影響力をもつ思想・文学・宗教・あるいはそれらの創り手もしくはにない手である特定の人物・集団など——が求められ，こうした人物，集団との同一化が行なわれて第一のアイデンティティへの対抗アイデンティティともいうべき第二のアイデンティティが形成される。ここでまたコースは2つに分れる。第2のアイデンティティが第1のアイデンティディを駆逐して生涯を通じてその方向での生き方を持続していくコースと，第一・第二の二つのアイデンティティが顕在的にせよ潜在的にせよ重層的に存在して同一人物のなかで葛藤をつづけ，やがて矛盾が止

揚されて周囲からは「大人になった」とか「ダメになった」とかいわれるようになり，自らも若き日の自分を「青年の客気」としてふり返るようになるコースである。この際，矛盾止揚ではなく，完全に第二のアイデンティティを葬り去ってその反動として第一のアイデンティティに戻る反動型の人もあるが，多くの場合どこかに第二のアイデンティティの影響を残した矛盾止揚型のコースを辿ったとみられる。勿論，さらに新しい準拠集団を求めて魂の遍歴を続けていく遍歴型のコースもあったが，不変型，持続型，止揚型，反動型のいずれかのコースを辿って何とか「落着く」のがかうての一般的な道筋であったと考えられる。

これに対して，今日では状況が違う。まず，父母が確固たる信条をもってこれを子どもに押しつけることが少ない。押しつけられないから反発して自立を達成するための別のよりどころを求めようというエネルギーもあまり出てこない。実のところ明示的な思想・信条の押しつけはなくとも世間並みあるいはそれ以上の暮らしのレールから外れるなという目にみえない生き方の押しつけは強く働いており，それはそれなりに重いのだが，それに歯向うことは社会全体に歯向うことになることを若者たちは感じとっている。前の世代の若者たちの叛乱をテレビなどでみて育った彼らは反抗の結果を先どりしてしまっている。それに加えて，思想界の多元化ということがある。すなわち，戦後しばらく多くの若者たちの対抗アイデンティティ形成のよりどころであり，数々の必読文献を青年たちに与えたマルクス主義は，今日「さまざまな思想の一つ」として相対化されている。伝えられるソビエトの実状やハンガリー事件や文化革命後の中国の変化が，人間のつくる社会で思想が完全に具現されることのむずかしさを痛感させたことがその主たる原因といえよう。また，60年代の多くの若者たちのよりどころとなっていた実存主義も，60年代後半の大学での一連の事態のなかで「アンガージュ」が試みられて社会の壁の厚さが実感されたことを通して影響力を弱めた。さらにいえば，戦後日本の基本原理として導入された当初は若者の親からの自立のよりどころとなった民主主義についても，親自身が

「非民主的」でも「封建的」でもない家庭が増え，日本の国内の政治ニュースや民主主義の手本とされたアメリカの人種差別のニュースなどから現念と理実のギャップを埋めることのむずかしさが痛感されてくるにつれて，かってのように自我形成のよりどころとしての強力な思想性をそこに見出すことはむずかしいという状態が起っている。いわば，かって若者たちを熱中させ絶対と思わせた思想がひとつひとつ現実の歴史のなかで試され，相対化されたり日常化されたりして，その後圧倒的な影響力をもつ思想が登場しないままに思想界は多元化されている。また，思想に代わって知識が絶対的なるものを提供する見通しも決して明るくはない。自然科学は確実なるものを提供できる部分が多いが，社会科学には研究対象の性質上仮説は提示しえても絶対まちがいのない法則を提示できるとはいい難い部分が多い。専門知識は多岐に分化し，専門外の人にも通用し，切り札として提示しうるような知識が大学教育のなかで提示されることも少ない。このような，対抗アイデンティティのよりどころとすべきものの弱体化と，さきにのべたように親たちの多くが対抗する必要のないまでに柔軟になってしまったことと，「絶対」なるものを見つけ対決すべき相手を見つけてしまったあとにくるであろう事態へのおそれなどが相乗しあって，青年の思想や知識への関心はたかまらず，読書欲は湧かない。

こうした状況のなかで，ある者はモラトリウムにたゆたい，ある者は自分だけの実感に忠実な「手づくりの思想」をつくろうとし，ある者は宗教への関心を深め[26]，ある者は目に見えないこの社会の伝統や「世間なみ」の生き方によりどころを求めて生きているのである[27]。

II－3．実感倫理

II－3－①　観念倫理の後退

こうした状況のなかで重要な役割を果しているのは「実感」である。今日，生存のための共存を求め，相対倫理のなかに生きている人々は，実感をもって自己の統合の原動力とし，またコミュニケーションの土台としていると考えら

れる。実感とは，『岩波国語辞典』によれば，「物事から得る実際の感じ」であり，「実物に接したように生き生きと感ずること」である。こうした感じを大切にし，そうした感じの湧いてこない情報に接したときはやむをえない事情のない限り心を動かしたり身体を動かしたりしないのをよしとするという生き方を，「実感倫理」と名づけておきたい。この倫理は，実感がついてこなくとも観念のレヴェルで一貫性があり説得力のある思想・知識などをさがしてそれに身を委ね，その観念体系をもって行動の指針とすべきだとする「観念倫理」ともいうべきものと対置される。なお，実感倫理は現実主義とも一線を画する。実感倫理をもつ人々は，現実があることを余儀なくさせるかにみえたとしても，それが好ましいことだという生き生きした感じが湧いてこなければ，積極的に動こうとはせず，生存・共存のための必要最小限の行動にとどめようとするのである。実感倫理はたしかに人々の関心領域や行動範囲を狭くし，想像力に支えられて社会がより理想的なものへと発展していくための契機を失なわせる。しかし，この倫理は，リーダー層の提示するタテマエに動かされて人々が望みもしなかった状況へひきずりこまれていくことを抑止する力としても働く。また，この倫理を体得している人々が一たん積極的に動きはじめるときは身体と頭と心が一体となったタテマエとホンネの乖離の少ない心底からの行動となると考えられる。

実感倫理の形成定着過程について詳しく触れる紙幅は残されていない。簡単に日本の戦後史のなかでのこの倫理の確立の主要契機を振り返っておけば次の如くである。第1に，敗戦によって，国家の強制した壮大な観念体系の虚構性を思い知らされたということが挙げられる。第二に，「相対倫理」の項でのべたように戦後上記の国家主義的観念体系に代わって人々の心をとらえた諸々の観念体系が何れも理念と現実との乖離の認識を通して影響力を弱めたということが挙げられる。第三に挙げられるのは，大学が60年代後半の学生たちの異議申し立ての主要な標的となったことを通して，そこで伝承され，生産されている知識体系の社会的意義に関する疑惑が人々の心に滲透したということである。

このような経過を経て，実感できない観念体系や情報を信じて行動の指針とし，自他の生命を危険にさらすことはやめようという態度が浸透してきた。もともと庶民の多くは何時の時代にも実感に生きており，国家や世論に強いられてある観念体系を信じていたかにみえてもそれはしばしばタテマエとホンネの乖離を承知のうえでの便宜的服従であったしその限りでは何も変っていないといってよい。変ったのは主としてリーダー層や青年たちであろう。上から与えられる，あるいは自らさがし求めた観念体系を内面化してこれを行動指針とする傾向の強かったこれらの人々の心に観念体系へのシラケが忍び込んだのである。

II－3－②制度の形骸化

かくして，今日この国では，立派なことばや美しいことば，むずかしいことばで人を動かす[28]ということは非常に困難になった。そうしたことばを語るリーダーたち自身がしばしば自らのうちにあるタテマエとホンネの乖離を自覚してシラケてしまう。たとえ語る側がその乖離に気づかずにそれを語ったとしても，聞く側――とりわけ若者たち――は，語られるタテマエと語る人の現実とのズレを直観的に見抜き，共存倫理にのっとって，ホンネをあらわに表現することは避けて，無関心と無感動をもってそれに応える。実感にそむいてタテマエに身を売り渡すことの不純さを，彼らは嫌うのである。

このように実感が重んぜられる時代には，制度の形骸化が目立ってくる。外圧によって他国でつくられた制度を輸入するという歴史を重ねてきたため，生活の現実や人々の実感の変化に応じてそれを吸い上げ，人々の合意によって内発的に制度をつくったり変えたりした経験に乏しい日本では，激しい社会変動にもかかわらず，制度は変えられることなく残っているという現象があちこちにみられる。進学率急上昇の影響に対処しきれない教育制度，都市化による人口移動に対処して定数を変えることができていない選挙制度などはその例である。実感をたよりに生きている人々がこうした制度と出会うとき大きな矛盾が生じる。こうしたところでは，制度化されたできごとやその担い手たちへの人々

の無関心ないし不信感が高まってくる。特に，今日，政治家への不信感はきわめて大きい[29]。こうした人々の不信感は政治という制度の担い手たちの質を低下させがちになる。勿論批判に応えて奮起する人もあるだろうが，権力や利権漁りに居直る人もいる。また，不評判な職種になればなるほど，人々の期待に応えうるような人物の参入の機会も減ってくる。こうした状況のなかで，各党が人々のなかに醸成されている実感倫理に気づかず，「他党（あるいは他派）は誤りで我党（あるいは我派）はすべてを見通しており，それを実現していく力を備えている」と対決倫理，絶対倫理の時代からうけつがれてきた絞切り型を語るとき，人々の政治への無関心ないし嫌悪感はいよいよ高まり，人々の参加意欲が衰えれば衰えるほど民主的諸制度はいよいよ形骸化するという悪循環が重ねられつつある。

II－3－③　生存・共存の土台としての実感

こうしたなかで人々はいよいよマクロな世界への関心を失い，自ら手応えをたしかめることのできるミクロな世界で生きる。

さきに述べたように，今日多くの若者は強力な親やリーダーたちとの同一化によってアイデンティティを確立するという状況を与えられておらず，さまざまな情報を脈絡もなく心のなかに共存させたまま生きている。この，ともすればバラバラになりそうな自分をひとつの一貫したまとまりある存在としてつなぎ支えている重要な要因は，「実感への忠誠」であろう。先にのべたように今日の日本社会では人々の行動のすべてに指針を与えるような強力な観念体系の影響力が下っている。その一方で，急激な社会変動と海外からの情報の洪水によってもたらされた多様な価値観や行動様式が競いあっている。こうしたなかにあって若者たちの多くが方向を見失なうことなく「生存」を全うしているについては，実感がついてこない限り動き出さないという原則に立っていることが大きな働きをしているといえよう。

実感倫理は，このように自分の心をつなぎとめるものであると共に，人と人との間をつなぎとめ「共存」を成立させるものでもある。利害やものの見方や

感じ方が違い，ことばを交わす気にもなれないという人々の間でも，共同作業やスポーツやゲームや音楽の演奏や鑑賞などのなかでちょっとしたまなざしや笑いの交錯する瞬間にある種のコミュニケーションが成立することは可能である。こうしたとき人々は，たとえ利害・立場は違おうともそれぞれに人間としてその人なりに人生を送っているのだということを受けとめあい，互いの人生がいまここに触れあって他ならぬこの人と他ならぬこの瞬間を共に生きているのだという感じを味わう。こうした，瞬間的な，客観的証拠もなく移ろいやすいものでありながらしかも当人たちにとってはきわめてたしかな「共に生きているという感じ」は，もともと日本人のコミュニケーションのなかで重要な位置を占めていたといってよいだろう。ことば多きを嫌い，ことばの上での一致よりも，無言で子どもの寝顔を中に微笑を交わし，会議のあとで酒を汲みかわし，茶を共に喫するという共同行為を重んじてきたこの社会の伝統が，思想・信条をひとつにして語りあう仲間を見つけにくい今日の若者たちのなかにも生きているといえるだろう。

II－4．人間倫理

II－4－①役割倫理の後退

前節でのべたように共に生きているという実感を味わうとき，人々はその場にいあわせる人がそれぞれに人間としてその人なりに生きているのだという事実を受けいれあい，受けとめあう。このとき人々は，実感の主体であるところの自分，他者によっておきかえられることの不可能なひとりの生身（なまみ）の人間としての自分が，これまたそれぞれに実感の主体であるところの生身のかけがえのない人間たちの織りなす網の目のなかに支えあって生きているということを確認する。こうした生身の人間としての自分の存在感を大切にし，生身の人間どうしのふれあい，支えあいを大切にして，他のひとびとをそれぞれにかけがえのない一回限りの人生をそのひとなりに生きている人間としてとらえ，各人の生き方を大切にしようという姿勢を「人間倫理」と名づけておきたい。この倫

理は，次のような意味での「役割倫理」ともいうべきものと対置される。社会ないし集団から与えられる役割を至上命令とし，たとえ実感がそれを肯(うべな)おうと肯うまいと使命感をもってそれを果すのが人間としての道だとするのが，ここでいう「役割倫理」である。ある人が同じようなポストで外側からみて一見同じように熱心に働いているようにみえたとしても，主として人間倫理——人と人との間に生きることへの情熱ともいうべきもの——によって動いている人もあれば，役割倫理——与えられた役割を完全に果すことへの使命感ともいうべきもの——によって動いている人もあり，両者の葛藤，折衷のなかで行動している人もある。人間倫理に生きる人々は，こうした違いを見分け，「人間味」のある人を信用し，たとえ時間や金銭面でのマイナスがあろうとも，人間としてのふれあいのある集団，組織を求めるのである。

II－4－② 産業化のなかの疎外感

上記のような傾向は，もともと日本人の間で強かったものであるが，とりわけ近年強まっているといえる[30]。このことは，産業化の進行のなかで員数として扱われたり，学歴競争の激化のなかで点数，偏差値，席次などの数値として扱われたりすることへの抵抗として理解することができよう。

組織の巨大化・官僚制化，機械化，都市化が進行し，大量生産による消費物資があふれるなかで，人々が生身の人と人との具体的な支えあいの網の目のなかに生きる自分を確認する機会は減少している。生産にせよ，販売にせよ，事務的な仕事にせよ，家事にせよ，その人でなければできない仕事を減らす方向に社会は動いている。こうしたなかで人々は自分が員数として，機能として扱われていることを感じ，自分が死んだらその欠落部分はすぐに——多少の時間的長短はあっても——他の人にとって代られ，自分のことは忘れ去られるであろうことを感じつつ，そうした傾向に抵抗しながら生きているのである。

II－4－③ 家族のきずな

上記のような状況のなかで，人々に残された置きかえ不能なかけがえのない関係のうちの最もたしかなものは，家族，とりわけ血縁によるため夫婦とちが

って選択の契機の働く余地のない親子関係である。たとえ家出，勘当——最近の親子の相互依存感の高まりを反映してこのことばがきかれることは稀になった——というかたちになったにせよ，親子の血縁と法的関係は切れることがないからである。かくして，産業化の進むなかで，親子の相互依存関係はいよいよ深まり，親は子に必要——心理的にも物理的にも——とされている自分を，子は親に必要とされている自分を感じあってそれぞれに自己を確認し，生きる支えとする傾向が強まっている。今日，この親子関係を基軸に「人間らしく」生き，家族・友人などを大切にして人と人との間に生甲斐を見出し，たよりあって生きようという欲求は，組織人としての役割を全うしようという欲求や，人々からはなれて地位や名誉を獲得するためのけわしい道を歩んでいこうという欲求を圧している[31]。かたすみのささやかな幸福——第三者からみれば月並みな，しかし自分だけにとって意味のあるかけがえのない世界——を人々は求め，泌々とそれを味わっている[32]。自己実現の欲求は，こうした幸福を損なわない範囲内で，ささやかな趣味や日常の仕事自体のなかで自己の可能性をひき出し個性を発揮していくなどのかたちで充たされる。Uターン現象や三世代同居論の復権はこのような意識の上に乗っており，女性の社会進出についてのコンセンサスが得られないことも，こうした社会意識を背景としている。合理化，機械化が進んでいく社会のなかで，「社会のなかに仕事をもつ」というだけでは必ずしも人間としての自己実現につながらないことを多くの人々は感じている。こうした夫や子供や隣人の実感に抗して働くだけの充実感のある仕事を見つけることのむずかしさと，かけがえのない人間関係のネットワークの要としての主婦に寄せられる期待の狭間で，女性論自体も今日さまざまな様相をみせている。

II－5．人並倫理

II－5－① 選民倫理の後退

観念に依りたのむことなく実感をよりどころとして人と人の間に生甲斐を求

めようとする人々が増えるとき，自分が他の人々と本質的に違った人生を歩むべく選ばれた人間だと信じ，一般の人々とちがう精神内容を獲得して彼らと隔絶した生活を築くのが正しい道だとして他の人にもそれを求め，平均的な人生を選ぶ人々を批判するという意味での「選民倫理」は後退せざるをえない[33]。それに代って，人々と同じようなライフサイクルの各段階を，人々と同じような精神内容をもち同じような幸福感を味わいながら生きていこうという意味での「人並倫理」が社会の前面に出てくる。勿論，今日も，「人並」ということばに抵抗感をもち，個性的な人生を求める若者は多い。しかし，多くの場合，彼らの自己実現は身近な人々と断絶してしまうことのない範囲でなされていく。「結婚適令期」は外から押しつけられるものというより内面から「個性派」をも含めた若者たちをつき動かすものとなり，子どものときから結婚，育児，老後を考えた生活設計が内面化されている。物質的な豊かさの如何にかかわりなく，人々は，結婚し，子を生み育て，その将来や家族の健康に一喜一憂し，同じテレビ番組を楽しみつつ日々を送っている。

II－5－②　生活の均質化と不安の増幅

戦争が抑止され，医療が発達した今日，人生途上の死は減って，男女人口もほぼ等しくなり，配偶者と2人前後の子どもをもって70数才まで生きるという人生パターンがひろくみられるようになっている。また，高度成長期を通して規格化された均質的な生活様式が全国に普及している[34]。その結果，ライフサイクルの面でも物質的な面でも人々の生活は均質化している。

貧富の懸隔が大きく，人生途上の思いがけぬできごとに耐えて波乱の人生航路を生きる人々も多かった時代とは違って，このように生活が均質化して約90％の人々が自分はとにもかくにも「中」程度の暮らしをしており，目下幸福であると答える[35]ような時代には，人生の規格から外れたときの不幸感，外れるのではないかという不安感はきわめて強い。もともと「人並み志向」の強かったこの国に，平和，民主化，産業化，医療やマスコミの発達等々によって，多くの国民が「人並み」の暮らしを求めうる，あるいは求めざるをえない[36]条件が揃

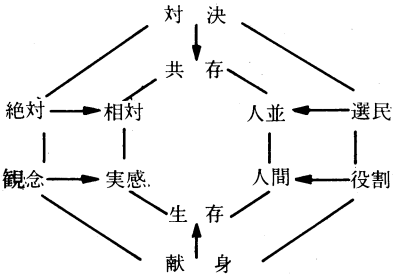
い，また，進学競争の激化やオイルショック以後の経済の翳りなどによって人並みの暮しから外れることへの不安が高まったことが，今日，人々の子育て・教育意欲，進学意欲，結婚意欲，勤労意欲，消費意欲，貯蓄意欲などを支え，高めている。ようやくにして確保した「人並＝中の中」あるいは「中の上」と自認する暮しを目に見えるかたちで確認しようとする欲求が販売側の働きかけと相まって消費を刺激し，ローン制度の普及をもたらして大量消費社会を支えている。他方，オイルショック以後の厳しさのなかで，こうした消費生活の基盤である会社をつぶすまいという欲求が人々の勤労意欲を支え，シラケ感覚や遊び志向の強い若者たちをもこの社会の担い手に仕立て上げている。人々の幸福感と不安感の拮抗するなかでひき起されるしあわせを求める活動のエネルギーが，目下のところは，結果的にこの社会を支えている。

III．社会変動のダイナミックス

III－1．「庶民」のエートスの顕在化

これまで述べてきたことをまとめると図2のようになる。外側は，対決の時代の諸論理であり，内側は矢印のような重点の移動の結果として生じた共存の時代の諸論理である。

図2　共存の時代の諸倫理と対決の時代の諸倫理



生存－相対－実感－人間－人並の諸倫理およびこれらの連鎖に支えられる共存のエートスは，決して'70年代になってはじめてあらわれてきたものではない。むしろ，大まかにいって[37]こうしたエートスは社会の表舞台から排斥され，指導者たち――体制親和的な指導者も体制批判的な指導者も含めて――やその影響の強かった青年たちによってうとまれさげすまれながら歴史のなかに連綿と「庶民」のホンネとして生きのびてきたものだといってよいだろう。今日になってこれが顕在化して時代のエートスとなっ

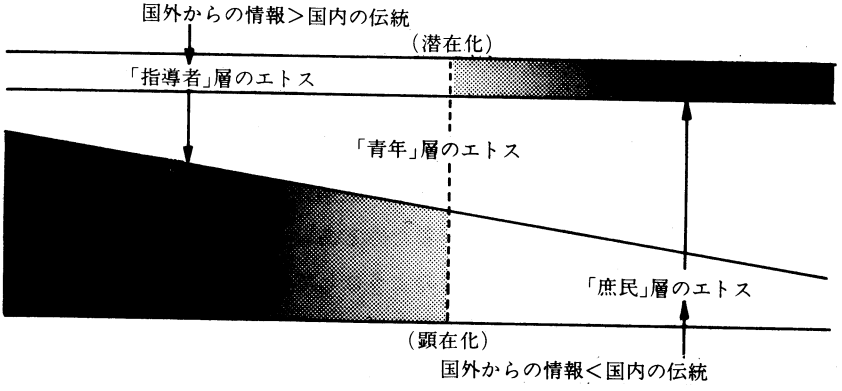
たということは，主として青年層の変化によると考えられる。

III－2．「指導者」・「青年」・「庶民」

ここで改めて，「指導者」・「青年」・「庶民」について規定し，三者の関係から社会変動のダイナミックスを考えてみよう。

私がこれらにカッコをつけたのは，これらを客観的指標によってではなく，本人の意識によって規定しようと考えるためである。社会には，他の人々を指導しようという意識の強い人々とそうでない人々とがいる。前者をその地位や収入の如何，実際に影響を与えうる人数の如何にかかわりなく「指導者」と呼び，後者を同じく地位・収入・影響力の如何にかかわりなく「庶民」と呼んでおこう。「青年」についても，実際の年令の如何にかかわりなく，本人が「大人」との間に一線を画し，「大人」と「子ども」の中間に自らを位置づけていれば「青年」ということにしておこう[38]。

図3　「指導者」・「青年」・「庶民」のダイナミックス



「青年」の多くが「庶民」の倫理を分ちもつようになり，それを表現するようにもなったについては，これまで述べてきたような国際政治や国の内外の経済・社会構造の変化，産児制限の普及その他さまざまな要因が働いている[39]。いま，少々角度を変えて高等教育への進学率上昇の影響ということに絞ってみておけば，図3にあらわしたようなことが考えられる。すなわち，高校教育進学

率が上昇し，若者にとって大学に入ることが珍らしいことでも「世間」からの隔離を意味するものでもなくなってくると，学生や大卒者たちの多くは自ら「選民」であるとは感じにくくなり，かっての大学生によくみられたように背のびして「指導者」のもつエーストや知識を身につけてそれを社会に滲透させていく役割を果そうとする傾向が薄れてくる[40]。もともと「庶民」のなかにも「青年」のなかにも「指導者」に導かれるのを好む者と彼らの影響を回避あるいは限定して導きも導かれもしない自律のみをこととする生活を求める者が含まれていたと考えられるが，競争者が増えて「指導者」意識をもっても容易なことでは実際に指導的立場に立ち難いことがわかってくると，「指導者」意識をもつことが労多くして得るものが少ないと感じられ，批判力・能力の開発が進んでいる「青年」のなかに服従を避けて自律を求める「庶民」志向の者が増えてくる。そして，彼らの多くは実感のなかに腰を据えてむしろ「庶民」のエートスを「指導者」の方に滲透させていく役割を果す。「青年」のなかには勿論何らかの点で実際の指導者になろうとする者もいる。しかし，観念の影響力の低下の故に，彼らの多くは知的訓練を実利的なものに限定し，大衆娯楽に親しんで「庶民」から浮き上らぬようにしながら「出世」の道を歩いていく。また，社会の現状を認識し批判しようとする少数の青年のなかにも，あえて「庶民」の眼から「指導者」のエートス，言動，知的営為などの虚構性を見破る役割を選ぶ者があらわれて，さきの自律的庶民志向の若者たちとあいまって「庶民」の倫理を顕在化させる働きをするようになる。このようにして，従来社会の表面にあらわれていた「指導者」層のエートスは，タテマエの多い白々しいものとして影響力を失ない，‘エライさん’が何をいおうとも時代がどうかわろうとも「庶民」のなかに脈々と流れていたホンネが社会の表面に立ちあらわれてくるのである。

マンガ愛続に象徴されるようなこうした「青年」たちの居直りを嘆き批判することは容易であるし必要なことでもある。しかし，こうした状況は戦後の世界の歴史の流れに深く根ざしており，無辜の人々の生きることへの切実な願いに基礎づけられている。このことを見ようとしない青年批判は，青年たちを動

かすことはできないだろうし，もし動かしえたとしても批判者自身思いもかけぬ方向に歴史をつき動かしてしまうおそれがある。歴史の歯車を逆転させて対決の時代に立ち戻り，平和を捨てようとするのでない限り，共存のエートスとそれを囲む諸倫理のなかにある可能性と問題点とを見きわめて社会変動の道筋を考えることが，当面の課題となろう。

おわりに

鶴見和子氏は，柳田国男に依拠しながら，先発国に刺激されて後発国が前者の示した手本通りの道を歩むのが近代化だとする西欧流の近代化論に対して，それぞれの社会にとって内発的な多様な近代化の道程があるとの考え方を示している。近代化とは，それぞれの社会が〝それぞれの社会の伝統を民衆の貧しさと苦しみとをなくす方向へむかって作りかえてゆく過程[41]〟であり，〝いかなる社会にとっても，それぞれの社会の伝統の形骸化された外皮を剝ぎ捨ててゆくことによって，その生き生きした核心を顕現してゆくこと[42]〟によってそのことが可能だとするのである。

戦後35年の日本の道程は，「指導者」が着せた「愛国者」や「モーレツ社員」や「西欧型近代人」－「公衆」・「市民」 etc,――の外皮を，「庶民」や「青年」が脱ぎ捨てて来る歩みであった。どうしても身体に合わない制服を着せられそうになったときには，彼らは一見身にまとったふりをしながら身をすくめて空っぽの制服を支えて歩いた。一見制服を着た人々が行進しているようでいて，実は空洞の制服が行進しており，人々の生身の心とからだは別のところにあった。「庶民」はマイホーム主義をもって政治や企業に呑のこまれることを避け，「青年」は四無主義をもって教育制度やその背後にある政治制度，経済制度に無言の――しばしば無意識の――抵抗を示しつつかたちのうえでは適応して歩いてきた。政治制度も経済制度も教育制度も，人々の心とからだをとらえ尽すことはできなかったし，「体制」に抗して人々の啓蒙をはかったリーダーたちの注入した知識やイデオロギーが実ることも必ずしも多くはなかった。

「上」からの近代化，「外」からの近代化がさまざまなひずみを残し，空洞化と挫折に悩んでいるとき，外皮を脱いであらわれてきた共存－生存－相対－実感－人間－人並の諸倫理の連鎖のなかに，内からの近代化の可能性は秘められているだろうか？

人々の，とりわけ若者たちの自己実現への願いが共存倫理のなかに封じこめられてしまうことのないよう，共存倫理が長いものに巻かれろの目先の共存に終って強大な力の前に人々の生存への願いが押し流されてしまうことのないよう，歯どめが必要である。その歯どめが確保されれば，生存の願いに裏打ちされた共存への願いは，不平等と不自由のより少ない共存形態をつくり出す原動力となっていく可能性をはらんでいるのではないだろうか。

その歯どめの一つは，「古きものすべてよし」とか「昔を今に」とかいう復古主義や，「庶民のものはすべてよい」というインテリにありがちな庶民への無限定な憧れ[43]に陥らないよう，古いものや庶民の心情を冷静に見る眼である。追随主義と啓蒙主義の狭間に道はあると考えられる。第二の歯どめは，今日の共存倫理が対話をすれば一致にいたることができるし全面的一致こそ求めるべきものだという対話倫理ないしは一致倫理の挫折ないし先どりされた挫折感のうえに出てきていることの認識であろう。一致ではなく「妥協」や「かかわりをもたず併存すること」を追求せざるをえないこともあるのだという苦い歴史的教訓を学ぶことなくしては，次の第三の歯どめをしっかり拵えることができない。第三の歯どめとは，そうした認識の上に立ってなお進められるより深いコミュニケーションの追求である。ひとびとに働きかけようとする者自身が，コミュニケーション能力を検討してその未熟を自覚し[44]，共に学ぶ態度をもち，コミュニケーション能力の学習に関する具体的な方法についての情報交換の場を設け，それぞれの持場にふさわしい学習方法を創り出していく営みが必要である。

今日，コミュニケーションをめぐる期待ないし課題は大きい。まず，心と心のふれあいないし交わりとしてのコミュニケーションという側面に関していえば，「共存」のなかの孤独という問題がある。今日の「共存」は，心情的な面で

のコミュニケーションに対する欲求水準の高い人々にとってはいささか物足りない。多くの人々が楽しい遊び仲間や家族をもちながら，ムードをこわさず共存を保つためにほがらかな仮面をかぶり続けることに疲れ，孤独感にとらえられている。そこで，しばしばかっての村や町の共同体への憧憬が語られ，その再興がはかられる。こうした憧憬を語る人々はとかく，かっての人情の「あたたかさ」がさきに触れたような「わずらわしさ」と表裏一体をなしていたことを見ようとしない。こうした「わずらわしさ[45]」を復権させることなく，新たな「あたたかさ」をつくり出すためには，上記の歯どめを生かした努力が必要である。

他方，情報伝達の手段，認識の手がかりとしてのコミュニケーションという側面に関していえば，実感に根ざした伝達の展開という問題がある。今日，実感にこだわって観念的なものに興味を示さない青年たちを，知的怠惰の名のもとに批判する「指導者」は多い。たしかに，実感倫理は人々の視野を狭め，歴史的展望をもちにくくし，知的遺産の継承を困難にして，現在の自分だけの生活にとじこもらせやすいということはいえる。しかし，他者に同一化しそこに起っていることを我がことのように感じとる想像力の訓練[46]が行なわれ，そうした想像力を通して問題を具体的に訴えることのできる伝達方法[47]が工夫されれば，実感へのこだわりはかえって「頭」だけでなく「心」と「からだ」と「頭」とが一体となった深いレヴェルの理解の礎石となりうる。観念の押しつけと無言の抵抗の狭間に実感に根ざしたシンボルによるコミュニケーションの世界を開くということは，困難だが，不可能ではないしごとであろう。少なくとも，教育過熱のなかで幼少の時からあまりにもはげしく自由を拘束されたり，テレビの「ながら視聴」のなかに浸されすぎたりした結果，「本物の四無主義[48]」に深くとらえられてしまった人々が新たに「青年」として大量に登場して次の時代のページをめくってしまった時より，現在の方がその仕事はやりやすいといえるだろう。(1979 年 11 月稿)

共存の時代

註)

1) ここでいう「時代」は歴史家があとからふりかえって外側から命名した「時代」とはちがう。同時代に生きる人々の内側からの実感としての「時代」である。

2) 勿論，青少年の自殺や殺人事件，暴走族のでき起こす事件など，「できごと」の報道もある。しかし，それ以前に，一見大過なく現代の諸制度に適応している青少年の日常性そのものが人々の関心を集めていることに注目しておきたい。

3) 前の時代から「三無主義」としてあげられていた「無気力」「無関心」「無感動」にこの頃から「無責任」が加えられて「四無主義」となる。

4) 朝日新聞に例をとると，本紙朝刊の「いま学校で」が1972年10月に開始され，今日まで続いている。なお，同じ社から刊行されている『週刊朝日』の大学入学者数高校別一覧の報道は1973年に開始され，受験過熱への批判と受験過熱を助長する報道とが相まって教育関係報道のブーム現象をつくり出している。

5) これらのレッテルの下に若者たちが互いを見，大人が若者たちを見ると，本来無関係なさまざまな理由からくる現象がすべてシラケや四無主義に見え，一方で若者の言動をしばる暗黙の規範となり，他方で彼らを身心の消耗から守るマスクとなる。1970年の24.0%から1978年の39.0%にいたる高等教育進学率の急上昇という未曽有の事態のなかで受験競争に本気でとりくんでいたなら起っていたであろう絶望・懐疑などからくる身心の障害や自殺・逸脱行動などが，「シラケ世代」だからこれ以上かり立てても仕方がないと親や教師があきらめ，本人たちもやや距離をおいてやむなくとりくむ姿勢をとったことによって防がれたケースも多くあったといえるであろう。

6) この「前の時代」の開始時点を定めることはむずかしい。筆者自身が幼く，あるいは無自覚的に過してきた時代に関して生活の内側からのエートスの変動の節目をさぐるためには，多くの内側からの証言を参照せねばならないし，現在私にはその用意がないからである。従ってとりあえず文中では主として1960年代の日本社会を念頭においてそれとの対比において今日の日本社会のエートスの特徴を述べるが，「前の時代」=1960年代と考えているわけではないことを附記しておく。

7) そうしたとまどい，焦立ちはたとえば『世界』1979年6月号，8月号の青年特集に示されている。

8) 彼らに続く少年たちの多くも従来の「子供らしさ」のイメージを欠いている。しかしここでは現在の青年たちと少年たちを一くくりに扱うことはやめたい。今という時代は次の時代を胚胎しており，今子どもである人々はすでに次の時代のエトスを宿しているかもしれないからである。青年たち自身，しばしば「今の子供は…」と異世界の人をみるようにいうことに留意しておきたい。

9) ここで私が問題にしたいのは明示的な徳目ではなく，人々がほとんど意識することがないままに人々の行動を動かしているエートスである。それ故本来は一つ一つ「〜のエートス」

と呼ぶ方が適当なのであるが，記述の簡潔化のために倫理ということばを用いておく。

10）この行き方は「和の倫理」といってもいいと考えられるが，「共存倫理」ということばを選んだのは，それぞれの立場・特性を認めあったうえでの関係ということを協調したかったからである。「和」のなかにはこうしたケースも含まれようが，それぞれの立場・特性の放棄の上に立った一体感を指すことも多いと考えられる。それぞれが立場を明確にしたうえで異なる立場の者どうしがかかわる場合でも，両者の立場のなかに違った意見・信念・感覚などをもつ者は集団から排除しようとか，自分と同じ意見，信念，感覚などをもつようにならない限り相手を人間として十分認めてコミュニケーションをもつことができないという前提が含まれていない限り，共存は可能である。

11）ＮＨＫ世論調査所が1973，1978年に同一調査項目で16才以上の全国民を対象に行なった「日本人の意識調査」のなかに住民の生活を脅かす公害問題が発生した場合どうするかをきいた質問がある。それによると，住民運動を起して問題解決のために活動すると答えた人が35.8％から28.2％に減り，波風を立てず解決されることが望ましいからしばらく事態を見守ると答えた人が23.2％から31.1％に増えている。なお，残りは有力者，議員，役所に頼むとする人でこの比率はほぼ不変である。（ＮＨＫ放送世論調査所編『現代日本人の意識構造』ＮＨＫブックス，1979，巻末付録Ｐ．21を参照）。

12）同調査のなかの職場の同僚との人間関係についての項目によれば，「なにかにつけ相談したり助け合える」全面的な深いつき合いを求める者が59.4％（'73年）から55.3％（'78）減り，「仕事が終わってからも話し合ったり遊んだりする」程度の部分的つき合いを望む者が26.4％から31.4％へと増えている。（同上書巻末付録Ｐ．12参照）。なお，同書PP．206～207では，50～54才と20～24才の男性どうしを比較したところ，高年令層に全面的なつき合いを求める者が多く，青年層では部分的つき合いを求める者が多いこと，しかもいずれについてもその傾向が73年から78年にかけて強まっていることが指摘されている。

13）前掲のＮＨＫ調査のなかで隣近所の人との望ましいつきあい方をたずねた結果は，「あまり堅苦しくなく話し合えるような」部分的つき合いを望む者が49.8％（'73年）から52.5％（'78年）と漸増，「なにかにつけ相談したり，助け合えるような」全面的つき合いを望む者が34.5％から31.9％と漸減している。なお「会ったときに，あいさつする程度の」形式的つきあいを望む者はいずれの年も15.1％と不変である。

14）家族内で成員間にコミュニケーションの深さや形態に関する期待のくいちがいがあり，これが顕在的，あるいは潜在的な葛藤の原因となっていることも多い。こうした期待のくいちがいによる葛藤は，学校，職場，地域などにおいてもみられる。

15）ゴッフマンの role distance 概念はこうしたふるまい方を説明するのに好適である。（E，Goffman, "Role Distance", in Goffmarn, *Encounters*, 1961, The Bobbsmerrill Co. 参照）

16）「受験戦争」はしばしば当事者である若者だけでなく家族全体にとっての「戦争」としてたたかわれる。従ってそれは父母，とりわけ自己実現の機会の少ない母親の闘争意欲を満た

す機会でもある。それだけに当人の闘争意欲が親のそれに及ばないときや本人の学力が親の希望をみたすに足りない場合には大きな葛藤が生じる。

17)生存倫理は，自己実現のために大きな賭けをするという行き方とも対置されよう。生存倫理に生きる人々は生存やそのために必要な自然的・社会的条件を危うくしてまで自分の願いを押し通しはしないのである。また，「生存倫理」は，余程の極限状況に追いつめられない限りは自分だけでなく他者のいのちをも大切にするという点において，極端なエゴイズムとも違うのである。

18)この関心は，病院批判を中心とする医療問題の社会問題化，薬づけの医療への反動としての，従来おとしめられてきた東洋医学の再評価などの現象となってあらわれている。また，医師がエンジニアに代って時代の花形職業となったについても，高収入という要因の他に，こうした社会的な「いのちへの関心」の盛り上りが底流にあるといえるであろう。

19)統計数理研究所の日本人の国民性調査（5年おきに同じ項目で20才以上の全国民を対象に実施）結果をあげておく。'68年から'73年にかけて特に自分の気持に近いくらし方として「金や名誉を考えずに趣味にあったくらしを」「その日その日をのんきに」が増え「世の中の正しくないことを押しのけて，どこまでも清く正しく」が減っていることが明らかである。ただしこの傾向は'78年にはとまっている。（統計数量研究所『数研研究リポート』№46，1979年3月，P25参照。）

	'53	'58	'63	'68	'73	'78
	%					
一生懸命働き金持になる	15	17	17	17	14	14
まじめに勉強して名をあげる	6	3	4	3	3	2
金や名誉を考えずに趣味にあったくらしをする	21	27	30	32	39	39
その日その日をのんきにくらす	11	18	19	20	23	22
世の中の正しくないことを押しのけて清く正しくくらす	29	23	18	17	11	11
一身のことを考えずに社会のためにすべて献げる	10	6	6	6	5	7
その他，DK	8	6	6	5	5	5

20)いわゆるイギリス病として報じられている事態は，人々の権利主張の強まりによってさまざまな社会サービスがストップして日常生活に不便を来している例である。日本ではたしかに社会，企業，家庭などへの人々の献身の衰えを示す徴候は少なくないが，目下のところイギリスほどの事態にはたちいたっていない。下表に示した「日本人の国民性」調査の結果（この項目は1979年に新しく設けられた項目であるため他の年と比較はできない）をみても，大半の人々は他人の献身倫理の衰えに敏感に反応しながら極端な献身要求や極端な利

己主義を排して互いの生活を尊重しあうことを通して社会を支えあいたいといったところでとどまっているとみることができるのではないだろうか。

たいていの人は次のどれですか？	①他人の役に立とうとしている。	19%
	②自分のことだけに気を配っている。	74
	③その他，DK	7
あなたはどれに賛成ですか？	①人のためにはならなくとも自分の好きなことをしたい。	35
	②自分の好きなことはともかく人のためになることをしたい。	55
	③その他，DK	10

21) ここでいう「相対倫理」は，それぞれが絶対なるものを信ずるということとは矛盾しない。非寛容な相互排除性を伴ったかたちでの「絶対的立場」でないかぎり，それを信じていても他の立場を認めることは可能だし，かえって，自分が信念をもつが故に他の人が信念をもつことを理解しそれを大切にするということもあるからである。宗教の世界でのエキュメニカル運動はそうした文脈において理解されよう。

22) こうした状況で，白熱した討論を成立させるのはむずかしい。人々が討論の活性化のために自覚的にあえて一つの立場をとってこれを強く打出さない限り，それぞれもっともな感想や意見がバラバラに述べられたままで終りやすいからである。

23) 朝日新聞の政党支持率動向調査によれば，1979年8月末に「好きな政党なし」「答えない」と答えた人を合わせると34%。(同新聞1979年9月13日付朝刊に無党派層についての資料と詳しい分折がある)

24) 統計数理研究所の「日本人の国民性」調査（残念なことにこの項目については1973年に調査が行なわれたのみである）で「～主義についてどう思いますか？」とたずねた結果は下記の通りである。「時と場合による」という回答が多いことが注目される。これについて，〝主義のために殉ずるという考え方ではなく「ある自分たちの望んでいる目的のためには主義を使い分けるという日本的感覚が出ているように思う〟と同研究所ではコメントしている（統計数理研究所国民性調査委員会『第3，日本人の国民性』至誠堂，1975，ｐｐ，224～5）。また，読売新聞社による衆議院総選挙後のフォローアップ調査(1979年11月実施，同紙1979年11月22日付朝刊）によれば，投票に行った人の半数近くが「衆議院での与野党の議席が接近している状態が続いてほしいと思って一票を投じた」(そう思った人47.4%――自民党支持者のうちでも35%――，そう思わなかった人31.1%，答えない人21.5%)ことが明らかにされている。こうした人々が伯仲国会で実質的な論議修正が行なわれることを期待していることも同調査で明らかになっている。

	よい	時と場合による	よくない	その他 DK	計
民主主義	43	46	2	9	100%

共存の時代

自由主義	30	44	10	16	100
資本主義	17	47	19	17	100
社会主義	14	51	16	19	100
全体主義	9	32	30	29	100
共産主義	5	34	45	16	100

25) 1969年6月に20才で自殺した女子学生の日記はかっての学生たちの感じていた非参加＝自己保身という内面的呵責と，コミットしきれなかった者の孤独感とを余すところなく書きとどめている。(高野悦子『二十歳の原点』1971年新潮社刊。現在新潮文庫所収)

26)統計数理研究所の前掲調査では，宗教をもっているとする者の比率は1953年の35%からいったん25%まで下った（1973年）が，1978年には34%ともとの水準に戻っている（前掲報告書P，32)。とくに若い人々の間におみくじ，祈願などへの関心や，新宗教への参加が目立つといわれる。

27) 同上調査の「あなたは，自分が正しいと思えば世のしきたりに反してでもそれをおし通すべきだと思いますか，それとも世間のしきたりに従った方がまちがいないと思いますか？」という問に対する「おし通せ」という回答は1953年の41%から1968年までほぼ同じであったのが，1973年に36%，78年に30%と減少し，他方，「従え」という回答は1953年の35%からいったんやや減少気味であったものが1978年には42%に増えている。作法の復活や豪華な家ぐるみの結婚式の復権なども目立っている。

28) 他人を動かすことがむずかしいだけでなく自分を動かすこともむずかしい。「～べきである」という観念で自分を動かそうとしてもとかく身体がついてこないのである。

29) 朝日新聞社の「第1回定期国民意識調査」(1978年実施，全国有権者対象）によれば，あなたは，これからあげるものについて，どれくらい信用をおいていますか」という設問のうち，政治家については，「信用している」3%（うち20～24才では0%。高年令層に信用しているとの回答がかたよっている)，「ある程度信用している」17%（20～24才では13%）となっている。これは，医者についての「信用している」38%（20～24才は28%。以下カッコ内同様)，「ある程度信用している」39%（49%)，裁判官についての「信用している」24%（19%)，「ある程度信用している」41%（51%)，教師についての「信用している」24%（12%)，「ある程度信用している」45%（49%)，警察についての「信用している」27%（15%)，「ある程度信用している」42%（47%）などと比べて著しく低い結果である。(『朝日ジャーナル』1979年3月23日号，P，131参照)。

30) 統計数理研究所の次の2つの質問を参照されたい。(前掲リポートPP，51，52)

		'53	'58	'63	'68	'73	'78
どちらの課長の下で働きたいか？	1,無理な仕事をさせないが，仕事以外のことでは人のめんどうをみない。	12	14	13	12	13	10

	2,無理な仕事をさせることもあるが，仕事以外のことでも人のめんどうをよくみる。	85	77	82	84	81	87
どちらの会社につとめたいか？（'73年より調査）	1,給料は多いが運動会や旅行などはしない会社。	—	—	—	—	21	18
	2,給料はいくらか少ないが運動会や旅行などをして家族的な雰囲気の会社。	—	—	—	—	74	78

（その他，DKは省略）

31）次の調査結果を参照されたい。

（その他，DKは省略）

		'53	'58	'63	'68	'73	'78
会社がつぶれるか否かがきまる会議があるとき故郷の親が危篤の電報がきたらどうしたらよいか？	1,すぐ故郷へ帰る	49	50	45	44	51	49
	2,会議に出る	48	41	47	49	41	44
就職のため家から離れる子供にどういったらよいか？	1,困ったことがあったらまず親に相談せよ	—	—	—	—	58	67
	2,今後親に頼るな	—	—	—	—	37	30
娘が嫁に行く場合はどういったらよいか？	1,親に相談せよ	—	—	—	—	54	57
	2,今後親に頼るな	—	—	—	—	42	39
つぎのうち大切なことを2つあげてくれといわれたら？	1,親孝行	—	—	61	61	68	70
	2,恩返し	—	—	43	45	43	47
	3,権利尊重	—	—	48	44	45	38
	4,自由尊重	—	—	40	46	43	39
家庭に満足ですか？（社会）	1,満足	—	—	—	—	48	54
	2,やや満足	—	—	—	—	33	32
	3,やや不満	—	—	—	—	13	8
	4,不満	—	—	—	—	5	4

（統計数理研究所「日本人の国民性」調査より，前掲リポートｐｐ，44，38，49，24参照）

32）前の注にあげた家庭への満足感のデータと次のデータとを参照されたい。

		全体	男	女	才 20～24	25～29	30～34	35～39	40代	50代	60以上
あなたにとって一番大切なものは？	健康	42	41	43	28	29	36	42	45	51	50
	家族	34	26	40	34	46	46	41	29	28	23
	仕事	8	14	4	7	7	7	8	13	9	6
	お金・財産	6	6	5	6	4	3	5	6	7	7
	友人	5	6	3	18	9	3	0	3	2	3

	趣味・教養	2	3	1	2	3	1	2	0	1	3
	宗教	2	2	2	0	2	2	0	1	2	3
	名誉・地位	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1
まわりの人からどんなふうにみられたいと思いますか？	正直な人	33	30	35	22	26	31	31	38	32	39
	平凡な人	20	17	22	14	21	22	17	20	25	19
	信念のある人	18	23	14	16	20	20	20	20	17	13
	やさしい人	13	6	18	20	14	9	13	11	11	13
	頼もしい人	8	12	4	14	7	8	8	5	8	7
	個性的な人	4	6	2	9	8	4	3	2	3	1
	有能な人	2	3	1	3	2	3	4	3	2	1

（前掲朝日新聞社第1回定期国民意識調査。『朝日ジャーナル』1979年3月23日号参照）

33) 勿論，高収入で権力があり尊敬される地位を求める人々は多いし，こうした地位の人々をもって「エリート」と呼ぶことも行なわれているが，それは，ここでいう精神的な面での「選民」とはちがう。

34) もちろん，今日も収入や財産の格差は大きく，生活水準によって価格の高い物を使ったり安い物を使ったり，豪華な旅行をしたりささやかな旅行をしたりといった違いはある。しかし，高収入層と低収入層，都市と農村で互いに想像し難いようなかけ離れたタイプの生活が営まれているといったことは，少なくとも戦前の日本社会に比べればかなり減っている。

35) 自分の家の生活程度が世間一般からみてどうかという点については，内閣広報室で1979年5月に実施した「国民の生活意識調査」で中の上8.5%，中の中60.6%，中の下22.2%，あわせて91.3%という結果がでている。また，現在自分が幸福と感じるかどうかという点については，読売新聞社が1979年8月に実施した「80年代への国民意識調査」のなかで，幸福37.7%，どちらかといえば幸福52.1%，あわせて89.8%という結果がある。ただし，対面状況での調査で生活程度「下」とか「不幸」とかいう回答は出にくいと思われるので，これはあくまでもそのように「思っている」人というよりそのように「答えた」人の割合として受けとめておきたい。

36) たとえば，産業化に伴って農業や自営業者にもたらされた困難な状況は，勤労者にならざるをえない人々を大量に生み出し，そのためのよりどころとしての学歴を求める進学競争の激化を促している。他方，こうした新たな参入者を迎えたホワイトカラー層の不安感は，既得権を守って子どもの将来と自らの老後の保障を獲得するための防衛反応としての極端な教育熱心を呼び起し，これがマスコミを通して全国に増幅されて，マートンのいう「予言の自己実現」現象をひき起して「受験戦争」の激化を招いている。そこには，人々の「心構え」だけではコントロールし難い「余儀ない」要因が働いている。

37) もちろん，この社会の庶民の伝統的な生き方と全く同じというわけではない。先にも触れたように，共存倫理のもつ，互いの違いを認めあったうえでのサラサラした相互不干渉という特徴は，かってのこの国の共同体の多くにみられた，互いの違いを許さず干渉しあうこと

の多い，一体感に支えられた密着した関係とは大巾に違っている。しかし，この点を除けば，脈々と流れてきた庶民のホンネの顕在化といっていいと思う。

38)高学歴化によって青年期の延長が著しく，モラトリウムが問題化している今日では，こうしたとらえ方も必要ではなかろうか。

39)戦後の日本社会に意識変化をもたらした要因としては，従来，国内における民主化，産業化とそれに伴う都市化，高学歴化，女性の地位の変化などがとり上げられてきた。勿論これらの要因も重要であるが，私はマス・コミュニケーションの発達した今日では世界全体の「雰囲気」を急速に規定してくる国際関係の動向により大きな注意を払うべきだと考え，また，産児制度の普及も社会の構造とエートスを規定する重要な要因と考えて，これまで，これらに重点をおいて述べてきた。しかし，勿論，上記の従来考えられてきた諸要因も重要であるし，そのなかで青年に関連の深いものとして特に高学歴化に注目しておきたいと思う。

40) すでに紹介した統計数理研究所の「くらし方」項目の分折（統計数理研究所国民性調査委員会『第3日本人の国民性』至誠堂，1975，P272，288。なお'78年の調査については層別結果は未発表）によれば，1968年調査までは一貫して高校卒の方が大卒より〝趣味にあった暮し〟に傾く度合いが強かったが，1973年には学歴による差はほとんどなくなってきており，50代以上の高年令層ではむしろ大卒者の方が趣味にあった暮しに傾いてきている。また，NHK放送世論調査所が1973，78年に同一項目で行なった「日本人の意識」調査のなかの仕事志向か全暇志向かをしらべる項目でも，大卒が仕事志向型から仕事・余暇併立型へと大きく転換し，高卒，大卒の意識差がほとんどなくなってきていることが報告されている（NHK世論調査所『現代日本人の意識構造』NHKブックス，1979，P，103)。

41) 鶴見和子「社会変動のパラダイム—柳田国男の仕事を軸として－」鶴見和子・市井三郎編『思想の冒険－社会と変化の新しいパラダイム—』筑摩書房，1974，P，152。

42) 同上書P．151－2。

43)「民衆」とか「常民」とか「人民」とかいうことばをもって「ふつうの人々」をとらえるときには，特にこうした憧憬の念に足をとられ，変革の主体としての一面しか目に入らないということになりやすい。他方，massの訳語としての「大衆」ということばをもってとらえるときには，無力な操作対象としての一面ばかりが強調されてしまう。両面を含む—集合体としても個人としても—ものとして，今も昔も「庶民」は存在しつづけているのではないだろうか。

44) 別稿（加藤春恵子「言語コミュニケーション能力の発達をめぐって」本紀要第38号所収）で明らかにしたように，コミュニケーション能力の発達は，われわれが生育過程で経験してきた家族内コミュニケーション，教育，マスコミュニケーション接触などに大いに影響されており，ひいてはこの社会の文化，経済，政治などの影響下にある。現代日本社会はコミュニケーション能力—とりわけて言語コミュニケーションの能力—の発達にとって好条件を備えているとはいえないから，われわれ自身コミュニケーション主体としての欠点をもっ

ていることが多く，その欠点は個人のおかれてきた環境に応じて多種多様である。

45) こうした「わずらわしさ」は，「五人組」あるいは「隣り組」風の上からの相互監視要請，家長に課せられてきた家族統制義務，女性が家族に縛りつけられてきたことからくる視野の狭さ，その他の歴史的条件によって支えられてきたものである。それらの条件がゆるめられると共に「わずらわしさ」がうすれてきたということができるのではないだろうか。

46) テレビ（ドラマ，マンガ，実写ものなど）に熱中した経験をもつ子どもたちは，かっての物語や映画に熱中して子ども時代を過した世代と同様，すでにそうした想像力の訓練をうけている。しかし，「ながら視聴」が日常化した時代に育った子どもにとって，テレビ視聴体験はそうした訓練の場ではなくなっていることが多い。この世代の子どもたちに対しては，ストーリーテリングなど，新たな方法が工夫されていることに注目したい。

47) テレビに関してはすでに高度の技術的工夫がなされている。昨夏と本年夏に行なわれた24時間番組「愛は地球を救う」は理解の深化という点ではなお問題を残したものの，こうした技術を生かした番組づくりの好例である。活字メディアについても，話しことばを生かしたインタビュー，対談形式の本など一部に工夫がこらされている。しかし論文などは依然として難解なものが多く，若者にとって読みやすいものは少ないままに彼らの知的怠惰や学力低下を嘆く声がきかれる。授業方法については，ビデオテープレコーダー，プロジェクターその他技術的開発は進んでいるが，抽象的思考に慣れたわれわれ教師の側の工夫と関心が技術の開発に追いついていない。

48) 四無主義といわれるものは，3種に分けて考えることができるように思われる。①自覚的抵抗としての四無主義②無自覚的抵抗としての四無主義③本物の四無主義，がそれである。①は教育制度およびその背後にある政治，経済の諸制度への非暴力的・消極的低抗として70年前後に生まれたものであり，②はその抵抗を継承してはいるが本人が抵抗であることをさほどはっきりと自覚していないものである。①②を示す人々は，いずれも気力をもってとり組んだり関心をもち感動を示し責任をもつ能力がないわけではないが，自らの意志に反してやむなく配置される教育などの場面ではこうした能力を放棄し，あるいは放棄したかの如く振舞ってやりすごしていくのである。これに対して，③は，教育過熱が深刻化した後に幼少のときからはげしく勉強させられて育った子どもたちにあらわれやすい，正真正銘の，何ごとにも関心，気力がなく，感動する力，責任能力もなく強いられないと動けないといった病理的状態である。①②は現代日本社会の諸制度に対する個人の防衛機制であると共に社会を少しずつ人間にとって住みやすいものに変えていく機能をも果すと考えられるが，③は現代社会のひずみそのものの所産であって精神的破綻を来しやすく，「適応」に成功したとしても強制に身をまかせて社会をいよいよ住み難いものにする役割を担いかねない。現在「青年」で四無主義ないしシラケの徴候を示している人々は一部を除いて②ないし①のタイプであり，③の大学への大量登場はこれからといってよいだろう。③に対しては，さらに徹底した教育内容の検討とコミュニケーション能力の再訓練が行なわれなければならな

いし，そうした教育・訓練を担う私共教師の側の再訓練もさらに厳しく行なわれる必要があるだろう。